

青塚古墳の墳形復元について

真鍋貴匡

はじめに

観音寺市青塚古墳は、古墳時代中期に前代からの系譜を追うことができない地域に突如として観音寺市の財田川左岸に築造された、帆立貝式古墳である(第1図)。また財田川の右岸には直接視認できない位置関係にはあるが、ほぼ同時期と目される三豊市大塚古墳(直径17.8m)が築造されており、財田川を挟んだ両岸に対照的に位置する。

当古墳が築造された香川県の古墳時代中期は、中期初頭の富田茶臼山古墳(139m)の築造以降、前方後円墳の築造が停止する時期であり、その時期以降には青塚古墳にも採用されている帆立貝式古墳や直径約30m程度の円墳が県内では、階層的上位に位置付けられる古墳と認識されている。

県内の帆立貝式古墳の墳丘規模が判明するような調査事例は少なく、綾川町所在の大塚神社古墳が唯一である。大塚神社古墳は全長50m(主丘部36m、小方部14m)を測り、青塚古墳とはほぼ同規模墳であることが知られている。

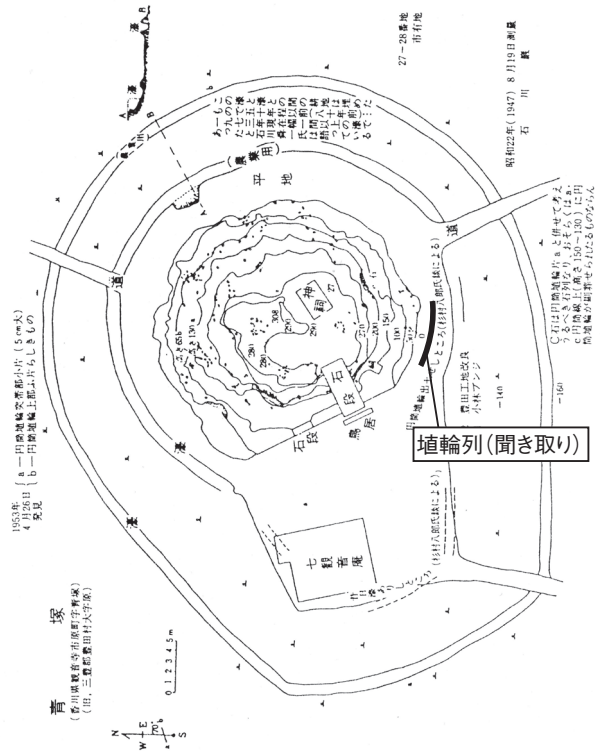


第1図 青塚古墳位置

本稿では、平成28年度に発掘調査が実施されたが、墳丘復元について言及されていなかった青塚古墳について、調査成果から想定される墳形復元について試案を提示するものである。

1. 研究史

青塚古墳は、古くは昭和22年(1947)に石川巖氏によって墳丘と周濠の測量調査が行われ、当時主丘部南側の一段目テラスの埴輪列の一部が露出していた箇所聞き取りがなされた(第2図)。墳丘測量図からは、全長44m、主丘部径33m、小方部長10mとの読み取りがなされている。『香川考古第3号』では、観音寺第一高等学校に所蔵されている表面採集された埴輪が公表されており、川西宏幸氏の埴輪編年ではⅣ期に該当すると考えられる。



第2図 石川巖氏作成墳丘測量図『観音寺市史より』(一部加筆)

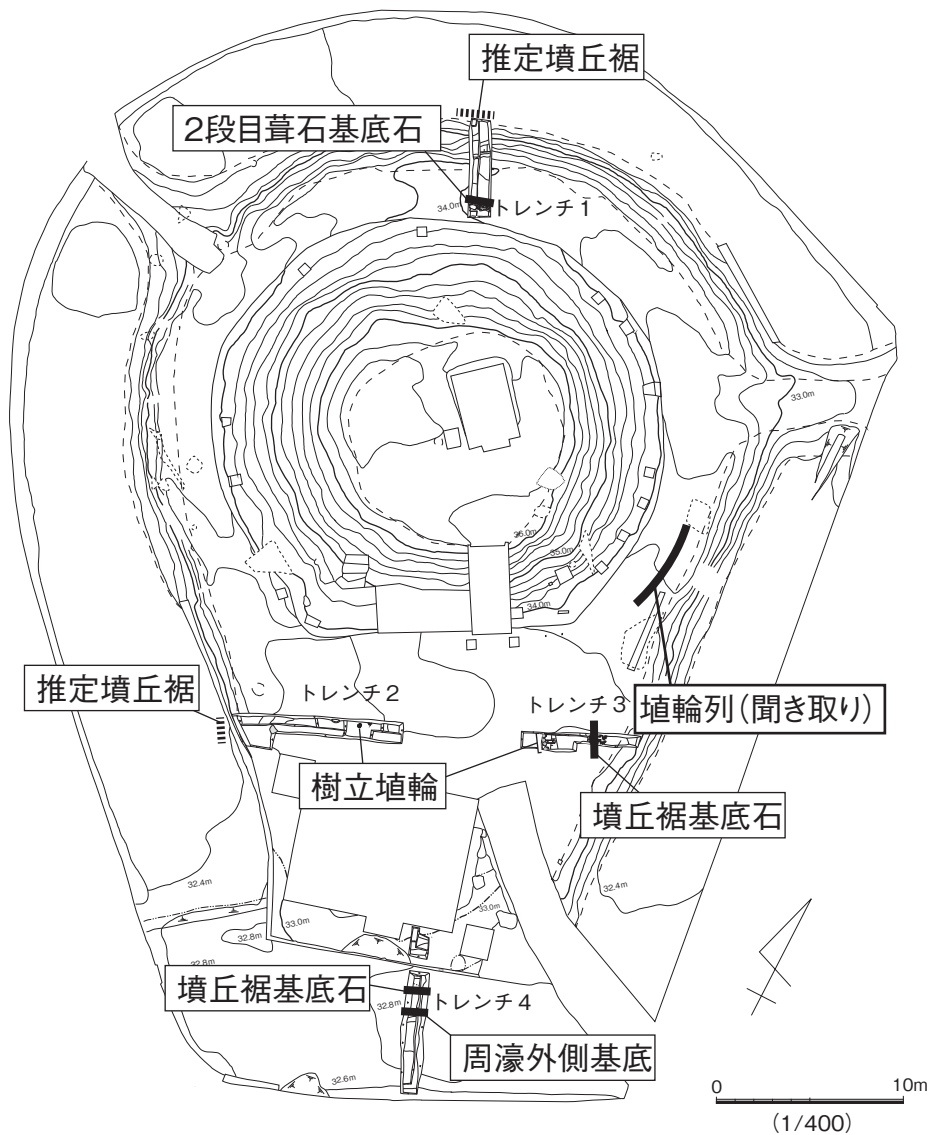
そして平成28年度に観音寺市教育委員会が観音寺市内の重要遺跡の確認調査を計画する中で、優先度の高い青塚古墳をあげ、測量調査と確認調査が実施された。古墳の全長や大きさを確認する目的で、墳丘裾を確認する位置にトレンチ設定がされている。そのトレンチ調査では、トレンチ4で小方部端、トレンチ3で小方部南側面端部をそれぞれ示す葺石基底石を検出している。また、トレンチ2では小方部上の埴輪列、トレンチ3では小方部側面の埴輪列を検出している。また、須恵器の器台が出土しており、TK208と報告されている。この調査は墳丘裾や時期比定が可能な遺物を確認できた重要な調査といえる。

2. 平成28年度の成果(第4図)

観音寺市が刊行した2019年の概報にて詳細が報告されているため、ここではトレンチ調査の成果から、古墳の墳丘復元の基本となる情報をトレンチごとに、列挙しておきたい。

トレンチ1

- 主丘部の1段目テラスに設定したトレンチで、河原石を長軸を横にして4段程度積み上げた主



第3図 墳丘裾の位置と樹立埴輪の対置関係

(観音寺市教育委員会 2019『市指定史跡青塚古墳確認調査概報』より) (一部加筆)

丘部第2段目の葺石を確認。基底石も遺存。

トレンチ2

- ・小方部北のくびれ部付近に設定したトレンチで、墳丘上に樹立された円筒埴輪を確認。

トレンチ3

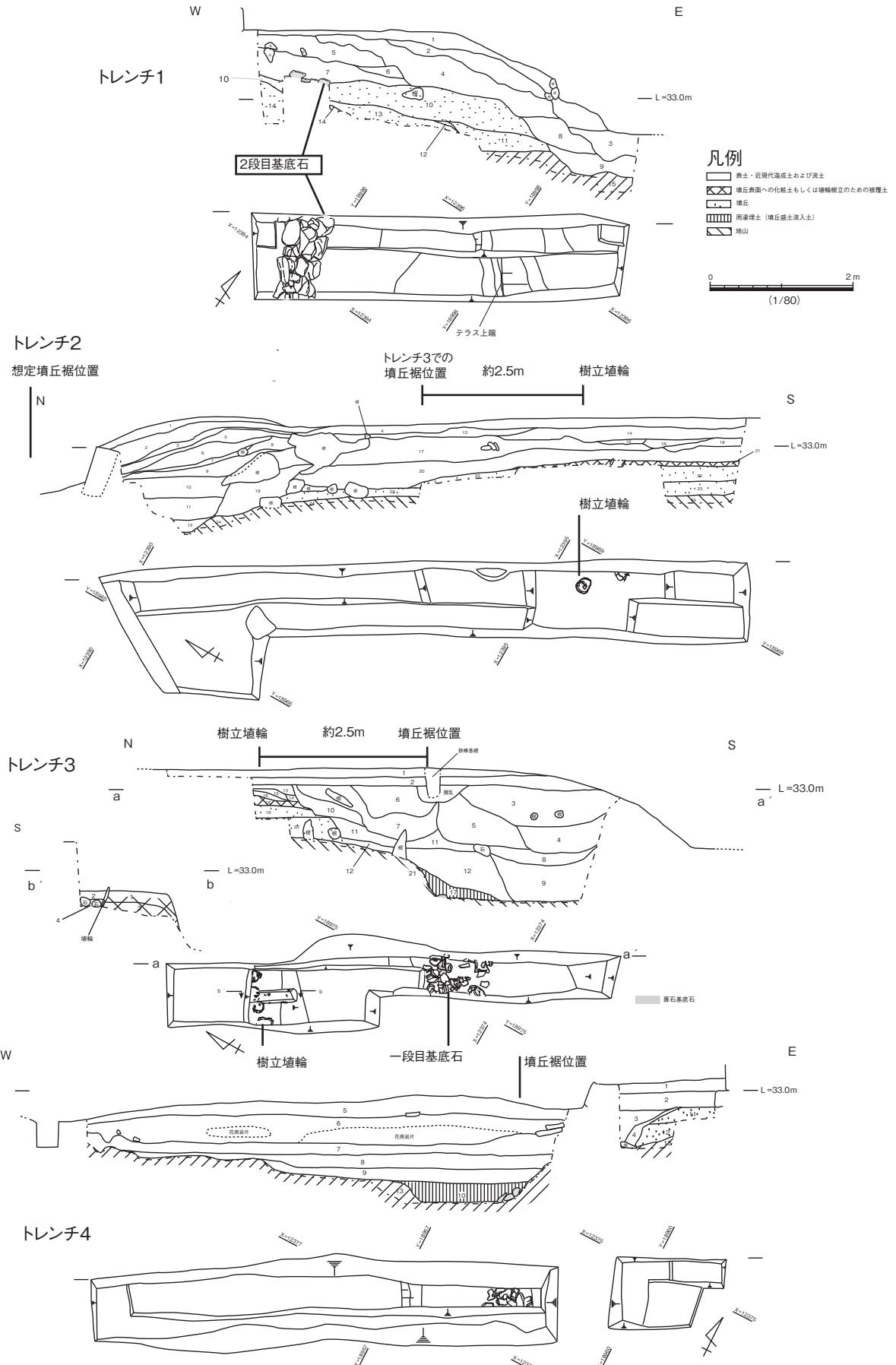
- ・小方部の南のくびれ部付近に設定したトレンチで、小方部1段目基底石と小方部1段目テラスに想定される小方部側面の円弧に沿うような埴輪列を検出。埴輪列と基底石の距離は約2.5mを測る。

トレンチ4

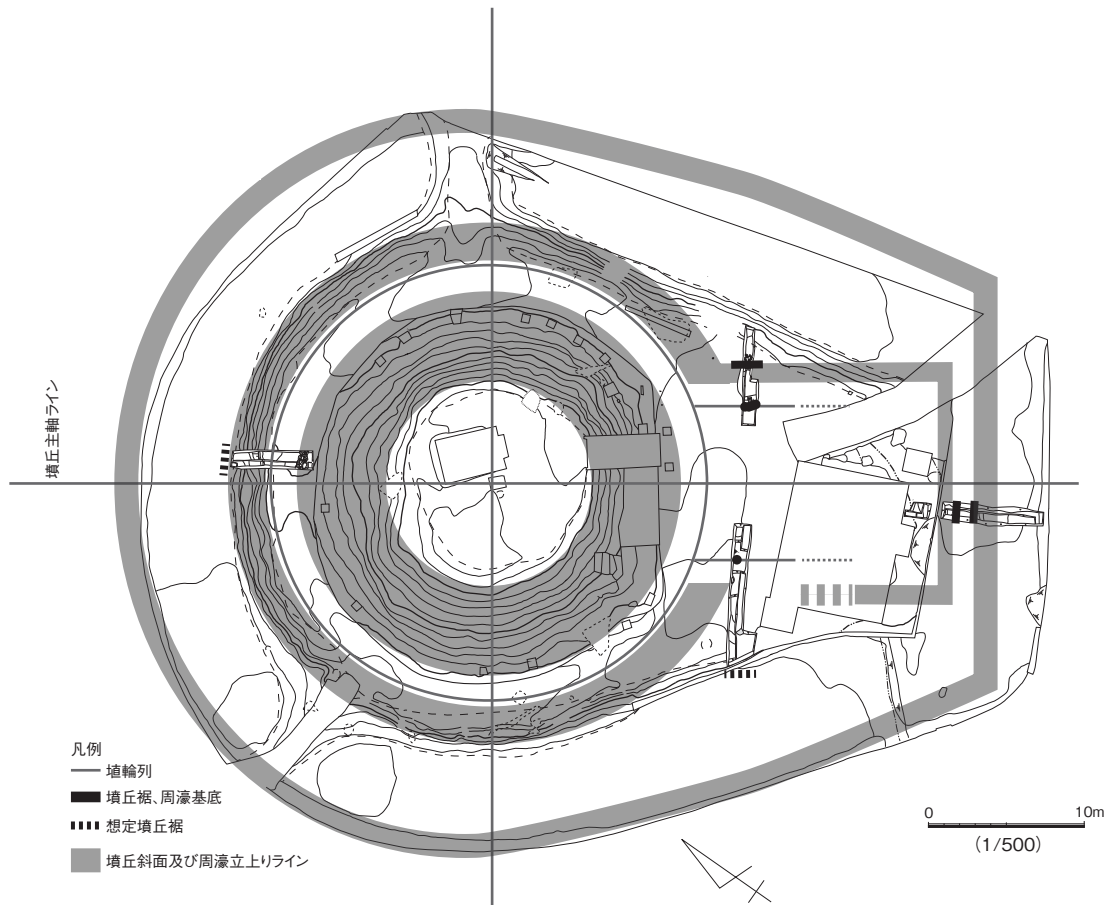
- ・小方部西側一段目基底石を確認。

以上、墳丘裾や規模を示す定点の情報を概観した。それらを、墳丘測量図に図示した(第3図)。

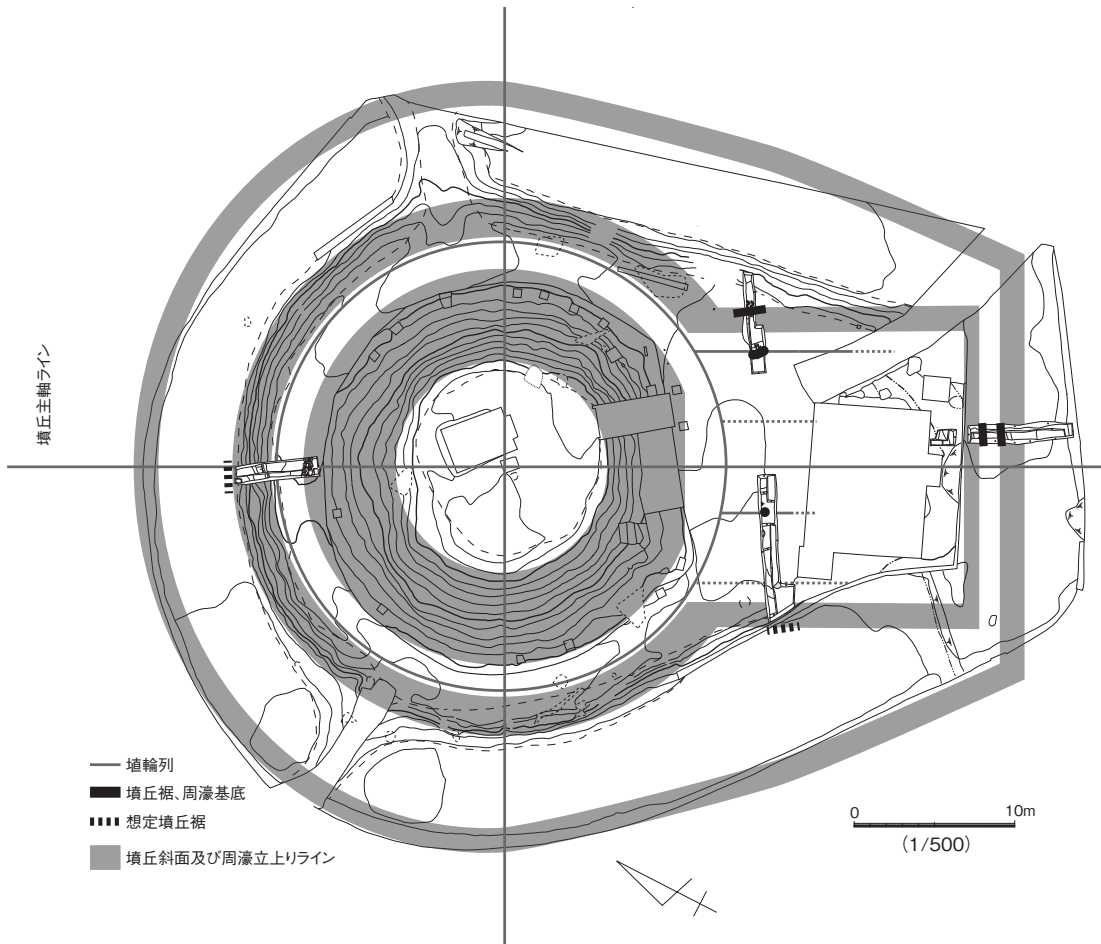
また概報でも報告されているが、トレンチ2で確認された埴輪が小方部側面を樹立したものと想定すると、トレンチ3とは状況が大きく異なり、トレンチ3(第4図)では墳丘裾から約2.5mで一段目テラスの埴輪列が樹立する。しかしトレンチ2では樹立埴輪から約2.5mはまだ墳丘内部であり、墳丘の盛土は樹立埴輪から6m程度続いている(第4図)。3トレンチではあくまでも想定ではあるが、見かけの墳丘裾である現状のコンク



第4図 トレンチ1～4（観音寺市教育委員会2019『市指定史跡青塚古墳確認調査概報』より）（一部加筆）



第5図 墳丘復元案1（観音寺市教育委員会2019『市指定史跡青塚古墳確認調査概報』より）（一部加筆）



第6図 墳丘復元案2（観音寺市教育委員会2019『市指定史跡青塚古墳確認調査概報』より）（一部加筆）

リート壁の外側に墳丘裾がめぐっているものと推定される。

周濠については、トレンチ4で確認された小方部前面の幅のみ判明しており、基底の幅は約1.0mと狭く、現状の地割の半分程度である。主丘部や小方部側面の周濠幅が判明していないため、根拠に乏しいが、可能性として、①現状のみかけの周濠の地割は、後世に拡張された姿である。②小方部のみ周濠を拡張されている。③周濠が段状になっているため、周濠底が深くになっている。そのほかにも可能性は提示できるが、いずれも決め手に欠ける。

今回の復元案では沼澤豊氏の墳丘規格論に沿って復元し、小方部で確認された埴輪列と墳丘基底間の位置関係を重視した2案を提示しておく。

3. 主丘部の復元

主丘部は、復元の根拠となる定点の情報はいくつか少ないが、トレンチ1の定点である2段目葺石の基底石や、墳丘の見かけの墳丘裾、傾斜変換点を考慮すると、主丘部の1段目は直径約33m、2段目は直径約24mに復元される(第5・6図)。従前から想定される主丘部径と変わらない。またそれらの主丘部の中心点は、主丘部頂部の祠付近に求められる。

4. 小方部の復元

小方部の復元については、トレンチ3とトレンチ4の小方部端を定点とする。また小方部中央の端は判明しているが、小方部の両端の位置が不明なため、主丘から小方部にいたる開きの度合いや小方部端の幅は不明である。県内の大塚神社古墳は小方部となる部分が台形上に少し長く開くことから、同様のものと想定されているが、トレンチ3で確認されている墳丘裾の位置関係などから、さほど開く小方部は想定できず、長方形を呈するものと考えられる。

また墳丘の主軸については、小方部前面の角度が不明であるため、主丘部の中心は同一であるものの、トレンチ2とトレンチ3で確認された樹立埴輪の解釈と想定される墳丘裾の位置関係により、小方部の復元案は2通りが想定できる。

トレンチ2とトレンチ3の樹立埴輪を小方部側面の埴輪とする案1。トレンチ2とトレンチ3とで想定される墳丘裾から樹立埴輪までの距離が異なることを重視し、トレンチ2の樹立埴輪は小方部側面、トレンチ3の樹立埴輪は小方部上の別の樹立埴輪とする案2である。

案1の場合、トレンチ2の墳丘盛土が樹立埴輪から6m程度続くことの解釈が必要となる。小方部の左右で形状が異なる案、造出しがとりつく案などがある。帆立貝式古墳に造出しがとりつく例を見ると、主丘部からとりつくもののみで、小方部側面にとりつく例はない。仮に青塚古墳が主丘部にとりつくように造出しがあった場合、小方部と近接するため、盛土との関係から現実的な案ではない。むしろ主丘部と小方部にまたがるようなものを想定せざるを得ない。ただし、今回の情報だけでは決め手に欠ける。いずれにせよ、小方部北側の主丘部と小方部のとりつき状況は今後の課題と

いえる。

案2の場合、小方部西側面が大きく削平されていることになるため、今後確認調査を進める上では、留意したトレンチ配置にする必要があるだろう。

小方部の長さについては、両案ともに12mである。小方部の想定される幅は案1の場合15m、案2の場合は20mであるが、根拠に乏しく、今後の検討課題である。

5. 周濠の復元

周濠の復元については、根拠となる箇所が小方部前面の幅のみであり、小方部側面や主丘部側面での幅などは判明していない。前述のとおり、様々な復元の可能性があり、判断できないため、極めて恣意的ではあるが、明確な小方部前面の周濠幅は確認調査で判明した幅を基準とし、側面から主丘部の周濠形状については、地割を優先した。今後の検討課題である。

6. まとめ

青塚古墳の墳丘測量図と発掘調査成果から、墳形復元案について思案した。既往の研究で示された想定通りの大きさであることは確認できたが、形状については課題が残る。小方部の幅や主丘部とのとりつき状況、トレンチ2とトレンチ3で確認した埴輪の解釈、同埴輪と想定される小方部両側面の墳丘裾の位置関係、小方部の傾きなど、課題が多く、それらの解釈により、復元される形状が異なる。

検討課題が多く、中途半端な内容となっているが、今後、確認すべき点は明らかにできたものとする。本古墳は香川県における古墳時代中期の数少ない調査事例あり、須恵器・埴輪、九州との接点がある石棺があることから、重要な古墳であり、今後も検討する機会を設けたい。

参考文献

- 石川巖先生遺稿集追悼集出版委員会 1976『石川巖遺稿集追悼集』
 香川考古刊行会 1994『香川考古第3号-特集:香川の中期古墳-』
 観音寺市教育委員会 1985『青塚古墳』『観音寺市誌』
 観音寺市教育委員会 2019『市指定史跡青塚古墳確認調査概報』
 沼澤豊 2006『前方後円墳と帆立貝古墳』雄山閣
 北條芳隆 2011『墳丘築造企画論の現状』『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社